

---

# 夢のまた夢

ハットリ

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢のまた夢

### 【Nコード】

N4340A

### 【作者名】

ハットリ

### 【あらすじ】

訳も分からぬまま、追われるままだに逃げる。ただひたすら。生きるために。

ドアを開けた少年の目に最初に飛び込んで来たのは、これぞ完全無欠の円と言うべき満月、そしてそれを背景に佇む一本の桜だった。桜は向かいの家が庭に植えたものだ。塀越しにその姿を見るたび母が、『咲いてるところは綺麗なんだけど、散っちゃったらただのゴミよね』と言っていたのを少年は思い出した。

今は彼女自身が、その命を散らした。

錆びた釘のような臭いが後ろから鼻孔を刺す。少年はそれから逃れるために夜の闇へと走り出した。素足で飛び出したものだから、アスファルトの硬く冷たい感触が直に伝わって来た。

「誰か！ 誰か助けて！」

走りながら彼は叫んだ。“狼が来たぞ”と叫び回った少年のように誰からも相手にされないとところまでソックリだった。彼は声の限りに叫んだが、左右に建ち並ぶ家々は優秀なSPのように、喚声を上げて駆け込む少年を弾き返した。

次第に彼は不安に駆られていく。ひよつとすると、この辺りで生きているのは僕だけかもしれない。みんな殺されてしまったんだ。あいつに……。

少年は初めて後ろを振り返った。

だいぶ走ったつもりだったが、まだ自宅の茶色い屋根を闇の中に見て取れた。『上から手を回して開けれるなら、意味ないじゃないの』と母親が愚痴をこぼしていた、背の低い門扉も確認できた。桜だろうが門扉だろうが、とにかく彼女はこの世のものすべてに一頻り何かを言わなければ気が済まない性分なのだ。

傍で聞いていた父親が苦笑いを浮かべ、『まあ良いじゃないか。こんなのは雰囲気なんだから。それとも何かい？ 君は全盛期のブ

「ブルカでも越えられないような高さじゃないと、安心できないのか」  
そう返したのを少年は覚えている。

あのときは少年も、そんな馬鹿高い門なんて普通の家には不似合  
いだし、必要もないと考えていた。しかし今  
そうするべきだった。

少年は後悔の言しか浮かばない。そうするべきだったんだよ父さん、母さん。あのとき門の高さをあと二メートルばかり上げていたら、こんなことにはならなかったかもしれない。少年は袖で目を拭った。それでもすぐに新たな涙が頬を濡らし、滲んで見える世界はサルバドール・ダリの絵に迷い込んだかと思う風情だった。「きiiiiiii  
いいiiiiiii」

列車が急ブレーキを掛けたような音が　不快な叫びが聞こえた。闇に目を凝らすと自分の後を追つて家を飛び出して来る人影が見えた。彼は知っていた　後ろから追い駆けて来るのが男であること、その右手が刃渡り三十センチほどの包丁を握っていること、そして何より、両親が男に殺されたこと　彼はすべてをしっていた。

もう一度涙を拭うと前を向いて走り始めた。

「きい  
い  
い  
い  
し  
し  
い  
い  
し  
し  
い  
い  
し  
し  
い  
い  
し  
し」

聞こえる声は益々大きくなる。

逃げなきゃ。気ばかりが急いて足は一行に前へ出ない。

[illegible]

苦しい呼吸に上がっていた顔が、今度は疲労のために下がって来ると、地面に長く伸びる影が目に入った。影は二本あった。ひとつは少年自身の。もうひとつは……。ピッタリ重なるようにしていた影から、一本の棒のようなものが生えた。何かを握っているらしいことから、恐らく右腕ではないかと察した。

少年は逃げるのを諦め立ち止まった。動いて刃が急所から外れると余計に苦しまねばならない。結果が同じなら苦痛の少ないほうが良いに決まつてる。彼は硬く目を閉じた。殺るなら殺れ　大きく

息を吐いた。

2

そのときだ、背中に違和感を覚えたのは。この場には似付かわしくない、何か安らぐものを感じた。その感触に少年は心当たりがあった。

もしかして……。

瞬間接着剤でくっ付いたような目蓋を、恐る恐る解いていった。すると目の前に見慣れた光景が広がって来る。カーキ色の壁紙（枯れ草の中に住んでいるような気分になる、と母は言った）を張った部屋だった。紛れもなく自分の部屋だ。

ということは。ベッドから起き上がりながら考えた。あれは夢だったということか？ それにしては随分とリアルだったな。まるで本当に走ったような疲労感がある。悪夢の所為だろうが寝汗もひどい。カラカラの咽喉は奥で粘膜同士が絡まっているようだった。

少年は目ヤニをこそげ落とすと、水を求めて階段を下った。身体を動かすのが億劫だった。肉体的な疲労もさることながら、精神もズタズタになっている。たとえ夢のなかとは言え殺されるのは気分の良いものではない。できることならもう、あんな夢は見たくないものだ。と。

彼は階段の途中で足を止めた。変な臭いがする。真夏の魚屋、刃物で切った傷に鼻を近付けたとき、そして錆びた釘のような……。その臭いには覚えがあった。ついさっき、嗅いだばかりでなかったか。

少年は頭の奥がチリチリと痛むのを感じ、それ以上進むのを躊躇った。だが結局は歩き出した。だっておかしいではないか。階段の半ばで分かるほど強い臭いなのに、一階で眠る両親が何も気付かないなんて。彼は下り切ると手探りで廊下の電灯を点けた。明るさに目が慣れるまで待つてからリビングへ向かう。臭いはそこから来ているらしかった。

近付くと荒い吐息が聞こえた。最初は自分かと思ったが、どうも

そればかりではないようだ。

「誰かいるの？」

少年は闇の向こうへ尋ねた。

「ねえ。いるんでしょ」

少しの間。

[illegible]

どんと背中が音をした。いつの間にか壁際まで退いていた。

闇の中で人影が一步、こちらへ近付いた。足元でピチャリと水の跳ねる音がする。

そうか、これは夢なんだ。まだ僕は夢を見ているんだ。きつと、そうに違いない。

人影はもう一歩近付いた。

だけど本当に夢なのかな？ さっきよりリアルな気もするけど。

さらに人影が一步を踏み出したところで、その手に包丁を握っているのが見えた。

少年は夢中で走り出していた。三和土（たたき）に置いた靴を蹴散らし、震える指で鍵を外した。

ドアを開けた少年の目に最初に飛び込んで来たのは、これぞ完全無欠の円と言うべき満月、そしてそれを背景に佇む一本の桜だった。

## （後書き）

このたびは拙作を読んで頂き、まことにありがとうございます。  
ついでに感想などもらえると大変うれしいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4340a/>

---

夢のまた夢

2010年10月8日15時45分発行